

平成30年度 第1回 地域連携による活力ある高校づくり協議会 議事要旨

日 時	平成30年7月9日(月) 10:00~12:00
場 所	岐阜県立恵那農業高等学校
出席者 (敬称略、 50音順)	<p>(委員)</p> <p>水野 正敏 岐阜県議会議員          小坂 喬峰 恵那市長          大宮 康一 岐阜大学地域協学センター 准教授          足立 能夫 JAひがしみの 代表理事組合長          田口 進 恵那市建設協同組合 代表理事          小椋日南恵 えな「たべる」プロジェクト アドバイザー          大畑 雅幸 恵那市教育委員会 教育長          荻巣 雅俊 恵那農林事務所 所長          岡田 庄二 恵那市立恵那西中学校長          春日井善久 恵那市立大井第二小学校長</p> <p>(高校側)</p> <p>本田 裕 校長          大塚 浩昭 教頭          伊佐治嘉文 事務長          佐藤 一喜 農場長          曾我 金泰 教務主任          河島 隆浩 生徒指導主事          安藤 正徳 進路指導主事</p> <p>(県教育委員会)</p> <p>高橋 宗彦 教育総務課 教育主管</p>
議事概要	<p>1 委嘱書交付</p> <p>2 学校長挨拶</p> <p>3 出席者自己紹介</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 子ども・親・地域に魅力がないと学校の存続は厳しい時代に入っている。どのようなことを行い続けなければいけないのかを考える会議にしていきたい。</li> <li>・ 恵那市だけでなく、地域を盛り上げるためには地域との連携が大切だと思う。</li> <li>・ 岐阜大学も地域に根ざした大学を目指している。大学では地域と連携した活動について実践しているので、そのノウハウを還元できればと思っている。</li> <li>・ 多くの恵那農業高校の卒業生がJAで働いているが、定着率が他校に比べ非常に高い。この会議でその根拠となるものを確認したい。農にかかわるということは食につながるということを意識してほしい。</li> <li>・ 恵那市の建設業者25社からなる組合で恵那農業高校の卒業生も活躍している。この業界の問題点もやはり担い手である。市や教育長にお願いをして、高校入学前の段階から普及活動を実施している。また、エゴマの耕作放棄地における栽培では、本当に恵那農業高校の生徒の研究熱心さに驚いている。この生徒たちの力になりたいと強く思う。</li> </ul>

- ・ 以前、恵那で「きじや」を営んでいた。引退後は食に興味を持ち、命につながる大切なことだと考えている。地域で活躍している農高生の活動をもっと紹介してほしい。地域での活動は女性が中心になってくると思うが、女性のメンバーが少ないので、もっと女性が活躍できる場を作ってほしい。
- ・ 県立高校の運営に、市教育委員会が口を挟むことを躊躇っていたが、地域との連携が活発になり嬉しく感じている。アイデア次第でどのようなことでもできるのが農業高校の強みだと思う。市の子どもの数が減少していることで生徒の取り合いになる可能性があるが、統合や再編を考えるのではなく、学科定員を30名にするなど高校を小規模してはどうか。
- ・ 県内には10の農林事務所があるが、そのうちの15～16%の予算を恵那地区で使用しており、この地区の農業・林業は盛んである。今年も卒業生が農業普及員として活躍している。中山間地としてどう生き抜いていくかを考えると、農高の役割は大きいと思う。
- ・ 以前に比べ高校の先生方と話す機会が増え、色々なことが分かるようになった。生徒にとってよりよい選択、入学して頑張れる生徒を入学させたいと思う。
- ・ 5月11日に野菜作り（小学校2年）でお世話になったが、関わりを持つことが本当に大切だと感じた。もっと関わりを増やすことで、子どもにとって恵那農業高校が身近な存在になるとよいと思う。

#### 4 これまでの学校の取り組みについて 学校長より基調提案、農場長より学校紹介

#### 5 意見交換

- ① 農業高校では多くのことを行っており、もっとPRしなければいけないと思う。地元就職者の農業関連の割合が低いのは残念である。保護者にとって、進路先が分かりにくいのがネックではないか。専門性をもった生徒を育ててほしい。
  - 毎年、JAや農業法人に数人就職しているが、求人数が少いため、就職者数が少ない現状である。関連の求人が増えれば就職も増えるのではないか。
  - 自営ではないが、公務員や食品関連産業への就職はコンスタントにある。
- ② 農高は30～40年かけて本当に魅力ある学校になっている。小・中学生にこの様子を見せ、もっと周知してほしい。小中学生が高校へ出向く、出前活動を充実させるなど活動を増やしていきたい。
- ③ 地元就職の地元とは、恵那市内であるのか、東濃地域であるのか。
  - 東濃地域で人数を集計しているが、ほとんどが恵那・中津川市内である。入学者はどうか？
  - 東濃地域の生徒がほとんどで90%以上が恵那・中津川市内である。
- ④ 恵那西中学校に勤務しているときに、造園が学びたくて加茂農林に入学した生徒がいた。恵那農高もアレンジメントなど特色をPRすることで、他地区からの希望者が増えるのではないか。
  - 畜産分野に関しては、岐阜農林高校等へ進学する生徒もいるが、今は他地区に進学する生徒は少ない。
- ⑤ 高校の説明を聞ける機会は増えたが、今回のようなデータをもらえば、学校独自で説明することもできる。生徒の生の声が届くような発信方法を考えてほしい。
- ⑥ 高校生の話を聞くことは、中学生にとって非常にインパクトがある。そのような機会を設け部活や学校のPRをする機会作れば、広がりが出るのではないか。

- ⑦ 中学生への紹介をもっとしてほしい。農高の卒業生は本当に社会に出て生き生きと活躍している。逆に、高校で頑張ったのに、それが活かせていない生徒も多くいて勿体ない。もっと色々な進路があることをPRすればよいのではないか。例えば、企業に対し、この子は花のことを勉強しているから、それを最大限生かしてほしいといったPRしてはどうか。人は、役に立ち、褒められて伸びる。
- ⑧ 地域連携に積極的に取り組んでいるが、生徒は、授業の中で活動しているのか、学外で活動しているのか。
- 両方である。課題研究の授業で取り組んでいるが、ボランティアでイベントに参加することもある。
- 課題研究は全員で取り組んでいるのか。
- 全員がテーマをもって取り組んでいる。発表会や卒業論文の制作、農業クラブのプロジェクト発表もしている。
- テーマは生徒が決めるのか。
- 生徒が決めることもあるし、継続テーマで教員が決めることもある。
- ⑨ 小さいころの体験が活きてくるため、小学校5、6年生を対象に高校体験（見学、説明会）の案内が送付される地区もある。小学校の児童向けの公開日を設けることで、高校を身近に感じ進路にも影響を与えるのではないか。
- ⑩ 農業関係の就職先が少ない現状がある。恵那市、中津川市で農地を守っているのは、担い手一部の方と営農集団である。高齢化する農家が、農地を集積し法人化した。その経営者たちも高齢化している。こうした法人に、農高の生徒たちが、就職できるとよい。そうすると農業の振興に貢献できる。
- ⑪ いきなり高卒で飛び込むには本人も保護者もハードルが高いので、法人など受け入れ先を充実させる必要がある。
- 恵那市や中津川市の企業は、色々な分野の人材を必要としているがミスマッチになっている問題がある。そのため、企業側に、農高の生徒がどんな勉強をしているのか知ってもらい、行政が仲介しマッチングする必要がある。
- 地域連携の活動について、人数調整の動員になっていないか。生徒のためになっているかどうか、学校も地域も関わり方を考えなければいけない。
- ⑫ 農業の担い手が不足し農業自給率や生産物（額）が減少しているのは事実である。しかし、高校生がすぐに自営できるかというそれは難しい。担い手の育成のために年間150～200万円の補助をしているし、経験できるような方策も取りたい。学校と話をして施策を考えたい。
- ⑬ 農業高校が地域に人材を輩出してくれるから、特色ある町ができましたとなるのが一番いい。例えば、恵那は、中津は、東美濃は、食に関しては日本中どこにも負けないぐらい素晴らしい素材があり、加工技術があり、飾り付けもできる。そう言えるのは恵那農業高校があるからですとなるのが一番いい。そのために、子どもたちに対して地域の皆さんが何ができるのか、地域の皆さんに対して子どもたちを含めて学校が何ができるか、密接な連携が必要である。既にいろいろな取り組みをしているが、地域のニーズに密着し、地域を支えていくのは俺たちだという強い思いの中でやっていくことが必要である。
- 計画の中には、「地域社会の発展に貢献できる社会人の育成」とあるが、今後は「この地域が存続できるかどうかを支えるための人材」をつくることになる。恵那農業高校が協議会を立ち上げてくれたので、それにこたえられる行政側、地域の皆さんとの話し合いの場を作らないといけない。

(県教育委員会から)

恵那農業高校は、現状でも活発に活動していると感じた。恵那地区に県立高校が7校あるが、そのうちの5校が小規模化が懸念される状況にあり、活発に活動し生徒も育てているが、危機感を持たなければいけない。

この協議会の委員に、市長や県議会議員、農業関係者、企業の方が入っていることは有意義であり、1回目の協議会としては、恵那農業高校の現状を知ってもらえてよかった。今後、恵那農業高校が、地域で唯一の農業高校としてどうあるべきかという視点をもって協議会を進めてほしい。高校での取組をどうPRするかが大切であり、この高校に入学して満足して卒業していく生徒の数を増やしてほしい。農業を学びたい生徒を増やすことも大切だが、東濃地区の活性化という視点も重要である。

6 事務連絡

7 学校長挨拶